

列島の古代史における阿光坊古墳群

東北大学埋蔵文化財調査室 藤沢敦

1. はじめに

阿光坊古墳群は、一般に「末期古墳」と呼ばれる¹⁾。「末期古墳」とは、主に東北地方北部において、7世紀から9世紀にかけて築造された、小規模円墳群である。「末期古墳」は、北東北3県と宮城県の北部に分布する他、北海道の道央地方にも分布する(図1)。なお北海道に分布するものについては、「北海道式古墳」と呼ばれることもあるが、基本的には北東北の木棺直葬の「末期古墳」と共通する墳墓群と考えることができる。

昭和63年に始まる阿光坊古墳群の調査は、多くの重要な成果をもたらしてきた。それは、阿光坊古墳群が存在する奥入瀬川流域の歴史研究に留まらず、「末期古墳」全体の研究、あるいはそれが造られた時代の北東北の歴史研究にとっても大きな意味を有している。ひいては、列島の古代史の見方そのものにも大きな問題を投げかけるものである。

本稿では、これらの点を検討し、列島の古代史全般の中において、「末期古墳」の占める位置、ひいては阿光坊古墳群の占める位置とその意義について検討してみたい。



図1 主な「末期古墳」の分布

2. 「末期古墳」をいかにとらえるか

阿光坊古墳群を考えるにあたっては、まず第一に、「末期古墳」を、いかなる墳墓としてとらえるかという問題がある。

(1) 「末期古墳」の系譜

「末期古墳」は、その名称にも示されているように、倭の領域で築造された「古墳」との関連で議論されてきた。実際、倭の「古墳」の強い影響を受けて成立したことは、まず間違いない。「末期古墳」の具体的様相は、同時期の倭における終末期「古墳」、あるいは前段階の後期「古墳」の中の小規模円墳との共通性が強い。木棺の構造など相違点もあるが、倭の「古墳」の中においても、地域ごとの変異は少なからず存在する。何よりも、「末期古墳」以前に北東北に展開していた続縄文系の平面楕円形の土壇からなる墓と、どちらが共通性が強いと言えば、答えは明白である。続縄文系の墓は、わずかな高まりは存在したとしても墳丘と呼べるようなものではないし、墓を区画する施設も存在しない。土壇の形態と規模から見て、屈葬の可能性が高い。伸展葬で棺に納められ、周溝で区画された墳丘を伴う「末期古墳」との差は大きい(図2)。また、「末期古墳」の成立とほぼ同時に、古墳文化に伴って展開してきた方形竪穴住居と土師器が北東北に広がる。このことを合わせて考えれば、「末期古墳」が倭の「古墳」の強い

影響のもとに成立したことは明らかである。

(2)「末期古墳」と倭の「古墳」

しかし、倭の「古墳」が、古墳文化の外縁地域に、遅れて波及したということで済まされるものではない。「末期古墳」が、倭の「古墳」と全く同じものとは考えられないからである。個々の具体的要素に共通性が強いとしても、両者を同一視することはできない。極めて重要な相違点も存在する。

この問題を考えるには、「末期古墳」と倭の「古墳」との比較検討が必要である。この点については、以前に検討したこともあるが（藤沢敦 2004）、あらためて簡単に触れてみたい。

①築造時期

「末期古墳」と倭の「古墳」が大きく異なる点の一つは、築造される時期である。倭において「古墳」の築造がほぼ終焉した後の、8世紀以降から9世紀にかけても、「末期古墳」は活発に築造され続ける。むしろ、倭の「古墳」が終焉した後に、「末期古墳」は最盛期を迎えると言って良い。

しかも近年の調査で、「末期古墳」には、長期間同一場所に古墳が築造され続ける例があることが明らかとなってきた。青森県八戸市丹後平古墳群と隣接する丹後平(1)遺跡では、7世紀後葉から9世紀後葉の約200年間にわたって、類似した墳墓が造られ続けていた可能性が高い（図3、村木淳・藤田俊雄 1996）。そして阿光坊古墳群では、7世紀前半に開始される阿光坊遺跡から、8世紀代の天神山遺跡、9世紀末まで続く十三森(2)遺跡へと至る。それぞれの詳細な時間的関係については、なお検討が必要であるが、阿光坊古墳群の「末期古墳」は、大きく途切れることなく分布している。この地において、7世紀前半から9世紀末に至るまで、類似した「末期古墳」が築造され続けていたことを示している。

②墳墓における階層性

さらに重要な相違点は、「末期古墳」においては、明確な格差が顕在化しないことである。

墳丘形態・墳丘規模、内部主体の構造、副葬品の構成において、「末期古墳」は均質性が強い。

「末期古墳」の墳丘形態は、やや楕円に近いもの、方形に近いものも存在するが、円形が基本である。周溝をめぐるのが通常で、明確な突出部が付くような例は知られていない。

墳丘規模は、最大で周溝内縁径17m程度、最も小規模なものは4m程度である。ほとんどは、5mから10m弱程度の大きさである。削平されている場合が多いが、少数の墳丘が良好に残っている例が

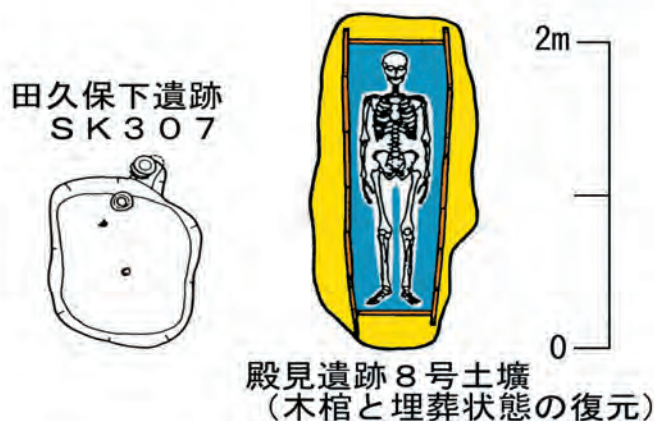


図2 続縄文文化の墓と「末期古墳」の主体部の比較



図3 丹後平古墳群の「末期古墳」の分布

ら想定すると、規模の大きなものでも2 mに満たず、多くは1 m前後の低い墳丘であったと想定される。また、墳丘を伴わず、主体部のみが検出される例も、少数ながら存在する。

内部主体は、木棺を直接墓壇に埋めた木棺直葬のものと、横穴式石室の退化した石室を構築するものに二分される。

木棺直葬の主体部は、「末期古墳」の成立時から存在し、終末まで続く。木棺構造は、側板の四辺すべてを、あるいは短辺のみを埋め込んで構築された、「据え付ける棺」が主体を占め、それらは最後まで続く。このような、側板を埋め込む木棺は、倭の「古墳」の中には近接時期の類例がない。倭の「古墳」の影響を受けつつも独自に創出された棺構造と考えられる。

一方、横穴式石室の退化した石室は、7世紀末頃に出現するものと考えられる。ただし、石室を伴う「末期古墳」の分布は、北上川流域に限定される。石室出現後も木棺直葬のものが造られており、木棺直葬から石室へ転換する訳ではない。初期のものを含めて、石室の規模が小さいことから、玄門から埋葬を行うことは困難で、追葬を行った可能性は低い。

副葬品には、刀類・鉄鏃などの武器、馬具、玉類などの装身具などがある。土器が棺内に副葬される場合もあるが、地域的に偏りがある。棺蓋上に土器を副葬する場合も認められる。棺内の副葬品が極めて少ないか、全く出土しない例もある。副葬品が多い場合でも、玉類を除くと、特定の品目が個人が使用する量を超えて、多量に副葬される例は認められない。

このように「末期古墳」の中には、規模の違いも存在し、副葬品の内容も全く同じ訳ではない。相対的な優劣関係は存在する。しかしながら重要な点は、他から傑出すると言いうような古墳が存在しないことである。特定の古墳だけが、他の古墳から離れて立地する例も知られていない。しかも、7世紀初頭頃の初現から終末に至るまで、類似する墳墓が築造され続ける。丹後平古墳群や阿光坊古墳群でも、200年間以上にわたる間に、他から傑出するような特別な墳墓は、ついに生み出されなかった。このような一つの古墳群の中に留まらず、河川流域のような一地域の内部においても、さらには北東北全体の中でも、明確な格差は最後まで顕在化しない。

この問題を、時間的な差異をとりあえず捨象して、倭において前方後円墳が築造されていた時期、すなわち前期から後期の「古墳」と、まず比較してみたい。

倭の「古墳」には、常に明確な格差が存在する。墳丘形態・規模、外表施設、内部主体と副葬品など、あらゆる点において明瞭な格差が存在する。その格差は、地域内の「古墳」において存在するだけでなく、地域を越えても存在する。倭の「古墳」には、たとえ緩やかであれ、大和（畿内）の巨大前方後円墳を頂点とした格差を内包しており、それらは階層的関係の中にあると見なして良い。このことこそが、北東北の「末期古墳」と大きく異なる点である。

問題なのは、「末期古墳」の成立が、倭において前方後円墳の築造が終焉を迎える時期にあたることである。前方後円墳の終焉を受けた終末期「古墳」を、それ以前の「古墳」と同等に考えて良いかということが問題となる。前方後円墳では、常に畿内に最大規模のものが存在したが、終末期「古墳」では畿内の圧倒的優位性は認め難い。このことは、巨大前方後円墳を頂点とした中央と地方の関係を表現する機能、言い換えれば、全体的な政治的関係を表現する機能が、墳墓においては失われていったことを示している。しかし終末期にも大型方墳・大型円墳、あるいは八角墳などが存在し、小規模墳との格差は残っている。「末期古墳」の分布域に近い、宮城県中部の仙台平野においても、多数の小規模円墳や横穴墓が存在する一方で、直径32 mの法領塚古墳が7世紀前半に築造されている。このように、終末期の墳墓においても格差が残っていることは、墳墓において表現される各地の首長層の關係に、階層的關係を表現するという機能が、依然として含まれていると考えるべきであろう。

このような倭の「古墳」と比較した時、「末期古墳」の均質な様相は、それに担わされた社会的役割が異なっていたと考えざるを得ない。墳墓における階層性が顕在化しないということは、その墳墓を共有する範囲の内部に、中央と地方の關係が形成されないということでもある。

もちろん、当時の北東北の人々の全てが、「末期古墳」に埋葬された訳ではない。限定された支配的

階層に属する人々だけが、「末期古墳」に葬られたと考えられる。その点で、当時の社会は、一定の階層分化が進んでいたと見なすべきである。このような「末期古墳」の被葬者たちが、相互に階層的関係を有せず並立している点が、大きな特徴なのである。

③墳墓に政治性は表現されているか

前方後円墳に代表される倭の「古墳」は、被葬者たる首長層間の政治的関係を表現すると考えられてきた。そのような政治的関係の有無を墳墓の様相から判断する基準は、墳墓における階層性と、その変化の連動性にあると考える。

墳墓の階層性については、上記したように、墳丘形態・規模、外表施設、内部主体と副葬品など、あらゆる点において明瞭な格差が存在する。その格差は、地域内の「古墳」において存在するだけでなく、地域を越えても存在する。その結果、たとえ緩やかであれ、大和（畿内）の巨大前方後円墳を頂点とした階層的関係が存在する。このことによって、各地の首長間の政治的関係、ひいては、中央と地方の関係を墳墓において表現したものと考えられる。

墳墓の変化の連動性については、例えば『前方後円墳集成』の共通編年（広瀬和雄 1991）の4期と5期の間や7期と8期の間には、地域を越えて、首長墓系譜の断絶や移動、小規模墳の急激な増減などの変化が見られる。変化の具体的様相には各地域の独自性も存在するが、一つの地域に留まらず、ほとんどの地域で同じ頃に大きな変化が生じている。このような墳墓の変化の連動性を説明するためには、政治的動向を介在させないことは困難である。

このように墳墓における階層性と、その変化の連動性が、倭の「古墳」においては明瞭である。それゆえ、そこには政治的関係が表現されていたと考える訳である。しかも、そこに表現された政治的関係は、一つの地域の枠を越えた広域における、中央と地方の関係であった。

この墳墓の階層性と変化の連動性という、まさにこの2点において、「末期古墳」は倭の「古墳」と異なっている。それゆえ、「末期古墳」には、被葬者間の政治的関係を表現する機能は見出し難い。

「末期古墳」の被葬者が限定された人々であったことは、地域ごとの共同社会の中にあって、「末期古墳」に副葬された支配的階層の人々と、それ以外の一般成員との違いを、「末期古墳」は表現していると考えることができる。しかし、「末期古墳」の被葬者間の階層的関係、その中における中央と地方の関係という、相互の政治的関係は表現されていない。

「末期古墳」は、墳丘の形など様々な具体的要素においては、倭の「古墳」との共通性が強い。その一方で、そこに込められた社会的機能という点では、大きな違いが存在する。倭の「古墳」を受け入れた側、すなわち北東北の人々にとっては、自らの社会にとって必要な機能のみを、選択的に受容したと言えるだろう。

3. 「末期古墳」が造られた時代

「末期古墳」が造られた時代の北東北は、列島の歴史の中でも、独自の展開を見せる地域である。「末期古墳」の有する歴史的意義を考えるにあたっては、それが造られた時代状況の中に位置づけて検討することが必要である。

(1) 「末期古墳」以前

弥生時代の終末から古墳時代初頭に、本州島の北部においては、北海道で展開していた続縄文文化が広がってくる。その中で、続縄文文化に伴う平面形態が楕円形の墓も、北東北に分布するようになる。住居については北海道も含めて検出例がほとんどなく、平地式住居か、かなり浅い竪穴住居が使われていた可能性が高い。そのため、集落の様相については、ほとんど検討することができない。一方、南東北には古墳文化が波及し、各種の「古墳」が築造され、方形竪穴住居と土師器が広がる。

このように古墳時代には、南東北三県に古墳文化が展開し、北東北三県に続縄文文化が広がり、東北地方の南北で、異なる文化が対峙する。その一方で、続縄文文化と古墳文化の間には、活発な交流が存在した。その背景には、鉄の流通を始めとする物資の、北海道までを含む広域流通が存在したと考えら

れる。両文化の境界領域である岩手県南部から宮城県北部にかけての区域では、古墳文化と続縄文文化の遺跡は、相互に入り組んだ分布を示す。特に5世紀後半には、相互依存関係とも言えるような、密接な関係を有するようになる（藤沢敦 2001）。

近年、八戸市の田向冷水遺跡では、5世紀後半の土師器を伴う方形竪穴住居からなる集落が発見され、続縄文土器や黒曜石製石器も出土している（小保内裕之ほか 2006）。ここでは、5世紀後半以降も集落が存続していた可能性もある。一方、田向冷水遺跡から新井田川を渡った対岸約 1.5km に立地する市子林遺跡では、田向冷水遺跡の集落とほぼ同時期の、続縄文文化に伴う墓が検出されている（大野亨ほか 2004）。古墳文化と続縄文文化の遺跡が、相互に入り組んだ形で分布するという状況は、岩手県南部から宮城県北部にかけての地域に限らず、北東北一帯で見られる可能性が出てきたと言えよう。

いずれにせよ、古墳時代に併行する時期の北東北には、続縄文文化が広がるものの、古墳文化の遺跡も存在し、両者が密接な関係を有しつつ、北海道までを含む広域の交流が存在したと考えられる。

（2）倭系文化の波及

田向冷水遺跡などの少数の例を除くと、古墳時代の北東北においては、土師器を伴う方形竪穴住居の検出例はきわめて少ない。ところが7世紀に入ると、北東北一帯に方形竪穴住居と土師器が広がる。それらから構成される集落遺跡も、農耕に適した立地が一般的となる。生業という観点からは、農耕を中心とする社会へと大きく変化していったと見なすことができる。

このような方形竪穴住居と土師器に代表される文化は、南東北以南の古墳文化に伴い展開してきた文化と基本的に類似するものであり、倭系の文化が波及していったと見ることができる。とは言っても、北東北と南東北の考古資料は、全く同じではない。北東北の土師器と南東北の土師器は、常に異なっている。しかし、土師器の地域差は、別に北東北に限らず、各地に見られる現象である。竪穴住居についても、細かな部分では違いもあるが、基本的には南東北と変わらない。

ただし、その中で注目しておくべきことは、北海道との関係である。「末期古墳」が活発に築造される7世紀末から8世紀にかけて、北海道の墳墓には、「末期古墳」から出土するのと同様の副葬品が多数見られるようになる。特に刀を始めとする鉄製品は、それまでの北海道の墳墓からは、ほとんど出土しない。「末期古墳」や北海道の墳墓から出土する刀については、その製作地を北東北に求める意見も強いが、律令国家のもとで作られたものと考えるべきであろう²⁾。北海道で出土するこれらの遺物が、北海道の人々が直接律令国家と交渉をもって入手した可能性も否定できないが、全てを直接的交渉と見るのは無理がある。少なくないものが、北東北の勢力が媒介して北海道へもたらされたと思われるべきであろう。北東北と北海道の間に活発な交流があったことは、「末期古墳」と共通する古墳が、北海道の道央地域に分布することからも明らかである。北東北の社会は、南の律令国家と、北の北海道の両方と、あるいは両者の間に立ち、活発な交流が行われていた社会であった。このような南北双方との交流は、前段階の古墳時代を通じて維持されてきた交流関係を基盤として成立したのであろう。

（3）蝦夷（エミシ）と「末期古墳」

一方、文献史料から明らかとなる北東北の様相は、全く異なっている。律令国家を形成していく中央政権は、主に北東北の人々を蝦夷（エミシ）と呼び、異族視した。律令国家の政治支配領域の外側に位置づけられ、律令国家内とは異なる別個の対処政策がとられた。律令国家は蝦夷に対して、貢納関係のもとに置くとともに、領域支配の拡大策を進め、度重なる軍事的対立に至る。

蝦夷と呼ばれた人々の範囲は、前段階の古墳文化の分布域などとは、厳密には一致しない。このことは、文化の漸進的変移の中に持ち込まれた、二項対立的な境界の恣意性を如実に示すものである。それでも、蝦夷と呼ばれた人々のかなりの範囲が、北東北で「末期古墳」を築造していた人々と重なることは間違いない。

「末期古墳」が造られた時代の北東北は、蝦夷の住まう地域として、律令国家の領域とは全く異なる歴史過程をたどっていく。ところが、考古資料に見える明確な文化的差異を、北東北と南東北の間で指摘することは簡単ではない。城柵遺跡や官衙遺跡など、政治支配に直接関わる遺跡は、当然ながら律令

国家の支配領域と対応する。また、北東北には仏教寺院の出現が大幅に遅れるが、南東北でも7・8世紀の寺院は、城柵や官衙の附属寺院が多数造られるように、律令国家の政治支配と密接に関連して展開する。このような、政治支配と密接に関係する遺跡やそれに伴う遺物を別にすると、北東北と南東北の間で、全く異なる文化と言えるような、考古資料の上での明確な相違を、簡単に指摘することは難しい。

「末期古墳」の具体的様相についても、倭の「古墳」と共通性が強いことは先に指摘した。その限りにおいては「末期古墳」も、7世紀以降北東北に波及する倭系文化の中にも含めることも不可能ではない。しかし「末期古墳」は、倭の「古墳」に顕著な墳墓の階層性と変化の連動性を欠き、それゆえ墳墓に込められた社会的機能という点では、大きく異なっている。このような「末期古墳」の社会的機能の違いは、北東北の社会が、単に律令国家の政治的支配の外にあったというだけでなく、独自の社会であったことを物語る、最も重要な考古学的証拠である。

4. 「末期古墳」の中での阿光坊古墳群の意義

「末期古墳」も、今日では多くの調査例が蓄積されてきている。その中において阿光坊古墳群がどのような意義を有するのかを、次に検討してみたい。

(1) 良好な保存状態

まず第一に指摘されるべきことは、阿光坊古墳群の保存状態の良好さである。

「末期古墳」には、良好な状態で古墳群が残されている例は、あまり多くない。多数の調査例がある一方で、破壊されてしまったものも多い。ある程度まとまって保存されている「末期古墳」としては、北海道江別市後藤遺跡、青森県八戸市丹後平古墳群、岩手県花巻市熊堂古墳群、北上市猫谷地・五条丸古墳群、宮城県栗原市鳥谷ヶ崎古墳群、石巻市和泉沢古墳群などがある。後藤遺跡は「北海道式古墳」と呼ばれることも多いが、基本的には北東北の木棺直葬の「末期古墳」と共通する墳墓群である。熊堂古墳群、猫谷地・五条丸古墳群、和泉沢古墳群は、石室墳からなる「末期古墳」である。鳥谷ヶ崎古墳群は、木棺直葬のものと石室墳の両方が存在する。八戸市丹後平古墳群が木棺直葬の古墳だけで構成される古墳群である。

このように、保存されている「末期古墳」は、石室墳に偏っている。より存続時期が長く分布範囲も広い、その点から普遍的と言える木棺直葬の「末期古墳」で良好に保存されている古墳群は、後藤遺跡、丹後平古墳群があげられる程度なのである。

「末期古墳」は、墳丘の高さが比較的低いことが影響して、調査以前に墳丘が削平されてしまっている場合が多い。その中でも石室墳は、削平をまぬがれている例が比較的多く、削平を受けた場合でも、全て削平されていない場合が多い。そのため、古墳の存在が認識しやすい。岩手県の北上川流域に存在する石室墳が最初に注目され、これら石室墳を中心に研究が進められてきたのは、このことが影響している。

ところが発掘調査が進展すると、木棺直葬のものが、より長期間かつ広範囲に展開することが明らかとなってきた。これらのほとんどは、開発に伴う調査によって、従来知られていなかった「末期古墳」が確認されたことによる。墳丘が削平されていた場合、発掘調査によってはじめて「末期古墳」の存在が知られるようになる。開発を前提とした記録保存のための調査では、「末期古墳」の存在が明らかとなっても、当初計画を変更して現状保存に持ち込むことは、現実には難しいことがほとんどである。そのため、多くの「末期古墳」が、発掘調査後に破壊されてしまうこととなった。それらの圧倒的多数が、木棺直葬の「末期古墳」であった。

このような結果、北東北の木棺直葬の「末期古墳」で、まとまって保存されているのは丹後平古墳群があげられる程度となってしまった。丹後平古墳群は、獅噛式環頭大刀柄頭など重要な遺物も出土し、木棺直葬の「末期古墳」の研究を大きく進展させることとなった重要な遺跡である（工藤竹久ほか1990）。これらの重要性が評価され、国史跡に指定されている。しかしながら丹後平古墳群は、墳丘がほとんど削平されており、その遺存状態は、必ずしも良好であるとは言えない。大規模な開発計画の中で、古墳群を保存するために計画を変更させたのは関係者の努力の賜物であるが、周辺の開発が進んだため、遺跡を取り巻く景観は大きく改変されてしまっている。

このような「末期古墳」の現状の中で、阿光坊古墳群の保存状態の良好さは、特筆されるべきである。

阿光坊遺跡・天神山遺跡の区域では、墳丘はほとんど削平されているが、十三森（2）遺跡の区域では、墳丘が良好に遺存しており、現状で63基が確認されている。このように、「末期古墳」で多数の墳丘が遺存している例は、他にはない。阿光坊古墳群では、若干の古墳が既に破壊された可能性も残るが、ほぼ全体が残されていると見て良いであろう。この点も、他に類を見ない。

「末期古墳」の中でも木棺直葬のものは、7～8世紀には、墳丘構築以前に主体部を構築する。そのため、墳丘が削平されていても、ほとんどの場合で主体部は残存している。ところが9世紀に入ると、墳丘構築後に、墳頂から墓壇を掘り込んで主体部を構築する方法へと変化すると考えられている。その場合、墳丘が削平されると主体部も削平されるため、周溝だけが残存することとなる。9世紀以降の例では、周溝だけが残存する例がほとんどを占めるため、このように推定されてきた訳である。十三森（2）遺跡10号墳では、墳頂から主体部が掘り込まれていることが確認され、この推定が裏付けられる結果となった。木棺直葬の主体部が残存している9世紀の「末期古墳」は、墳丘を有せず主体部のみが構築された秋田県秋田市湯の沢F遺跡（石郷岡誠一ほか1984）を除くと、他にはごく僅かしか知られていない。そのため阿光坊古墳群の十三森（2）遺跡は、数少ない貴重な例となる。

（2）長い存続期間

阿光坊古墳群を特徴づける、もう一つの特徴は、その存続期間の長さである。

石室墳の調査が中心であった時期には、「末期古墳」は8世紀代を中心に築造されたと考えられてきた。しかし木棺直葬の調査例が増加するとともに、築造時期の幅は拡大していく（高橋信雄1987）。岩手県矢巾町藤沢えぞ森古墳群の調査によって、7世紀代に遡る「末期古墳」の存在することが確実となった（西野修1986）。岩手県北上市（旧和賀町）岩崎台地遺跡群の調査では、7世紀初頭まで、その出現が遡ることが明らかとなった（高橋與右衛門ほか1995）。

「末期古墳」の築造年代の幅が拡大することが明らかとなる中で、八戸市丹後平古墳群と隣接する丹後平（1）遺跡の調査によって、「末期古墳」には、同じ場所で長期間造営が続けられる例があることが明らかとなった。そして阿光坊古墳群の調査が進展することによって、7世紀前半代から9世紀末葉に至る300年間近くの期間、同一古墳群での造墓活動が続けられており、丹後平古墳群より存続期間が長いことが明らかとなった。

さきに「末期古墳」には、倭の「古墳」に特徴的な階層性と連動性が見られないことを指摘した。丹後平古墳群や阿光坊古墳群においては200年間以上築造が続くが、ついに他から傑出するような墳墓が生み出されなかった。このような「末期古墳」の均質な様相は、存続時期が長期に渡る丹後平古墳群や阿光坊古墳群の調査によって、明確になってきたと言える。

「末期古墳」では、古墳群全体の様相が明らかとなっている例が少ないため、存続期間については明確さを欠く場合が多かった。また、阿光坊古墳群のように、存続年代が長期間に渡るものではない古墳群も存在する。それらを含めて、築造時期や地域が異なる古墳群の間で比較しても、明確な格差は顕在化しないと言える。丹後平古墳群や阿光坊古墳群の調査は、この問題を考える上での、一つの基準となったのである。

阿光坊古墳群は、その存続期間が長いこと、「末期古墳」の特徴を、最も明瞭な形で体現した古墳群であると評することができる。さらに、上記した保存状態の良好さも相まって、まさしく「末期古墳」を代表する古墳群と言える。

5. 列島の古代史における「末期古墳」

（1）倭の周縁域の墳墓

「古墳」は、列島にくまなく分布する訳ではない。古墳時代を前後する時期には、北東北の「末期古墳」以外にも、各地で独自の墓が造られていく場合もある。そのような、倭の「古墳」とは異なる独自の墓を造った地域との比較検討も重要な課題である。詳しく検討を加えなければならない課題であるが、こ

ここでは簡単にいくつかの視点について触れておきたい。

古墳文化の南端にあたる九州島、特に南九州と周辺の島嶼地域には、古墳時代に独自の墳墓が展開したことが知られている。南九州には、地下式横穴墓・地下式板石積石室墳・立石土壙墓と呼ばれる、この地域独自の墓が分布している（東憲章 2001）。鹿児島県の西側にある長島には、積石塚古墳が海岸沿いに造られる（長島町教委 1982）。大隅海峡を渡った種子島には、海岸沿いの砂丘上に、砂地埋葬遺跡があり貝符を副葬する特徴的な墓が造られる。これらの墓は、倭の「古墳」とは大きく異なっているが、「古墳」が築造される時期に併行して造られており、北東北の「末期古墳」のように、8世紀以降まで続くことはない。倭の「古墳」が終焉した以降も、類似する墳墓を造り続けるという点では、北東北の「末期古墳」は、列島の中でも極めて特殊であると言える。

地下式横穴墓や長島の積石塚は、「古墳」と分布域が重なる。地下式横穴墓の中には、「古墳」に伴って造られているものもある。これらは、各地の「古墳」の消長と連動する場合もあり、この点から「古墳」に表された階層秩序の中に取り込まれていった可能性が高い。独自の墳墓形式であっても、「古墳」と同様の社会的機能を持つ場合もあることを示している。

一方、種子島の砂地埋葬遺跡である広田遺跡では、古墳時代初頭から7世紀にかけて、同一場所で埋葬が行われ続けている。埋葬方法は、新しくなると二次葬へと変化するが、貝符の副葬は同じように続けられる（広田遺跡学術調査研究会編 2003）。倭の「古墳」は、しばしば築造場所が変化したり、系譜関係が途切れる場合があることが各地で確認されている。このような現象は、広域の政治的変動を反映したものと考えられている。しかし、種子島の広田遺跡は、長期間に渡って比較的安定して墓が造り続けられており、この点で倭の「古墳」とは対照的である一方、北東北の「末期古墳」の展開状況に類似することは興味深い。

このような周縁域の墳墓には、それぞれに固有の条件と歴史的背景が存在する。それらを歴史的に位置づけていくためには、表面的な墳墓の形式差だけに留まらず、その展開過程や、倭の「古墳」との関係性、その社会的機能などを検討していくことが必要である。

（2）考古資料による文化の把握

「末期古墳」が造られた時代、考古資料に見える文化的な明確な差異を、北東北と南東北の間で指摘することは簡単ではない。にもかかわらず、この時代の北東北は、蝦夷の住まう地域として、律令国家の領域とは全く異なる歴史過程をたどっていく。律令国家の政治支配に直接結びつくような遺跡を除くと、「末期古墳」の展開過程に見える社会的機能の違いなどが、相違点としてあげられるにすぎない。このことは、考古資料から帰納される文化のまとまりが、地域ごとの歴史過程の違いをどれだけ反映しているのかという根本的な問いを投げかけるものである。

これまで、北海道・北東北や九州島南部・南西諸島を除く列島の大部分は、古墳文化として一括りにして議論されてきた。ひるがえって考えてみると、はたして本当に単一の文化の歴史として描くことが妥当なのかという疑問に行き着く。考古資料の類似性から、たとえば土師器や鉄器などの共通性によって、同じ古墳文化として把握される地域が、同様の社会として、同様の歴史過程をたどったのか、あらためて考え直してみる必要がある。古墳文化として一括りにされる中にも、前方後円墳が存在しない地域もある。逆に、前方後円墳が存在する地域においても、竪穴住居におけるカマドのあり方には、その採用が著しく遅れる場合も含め、きわめて多様である。古墳文化としてまとめられてきた中においても、いくつかの問題を、直ちに指摘できる。このような問題を検討していくためには、考古資料に基づく文化の概念、その有効性と限界があらためて問われる必要がある。

これまでの日本の考古学・歴史学では、古墳時代の大和政権から律令国家に至る歴史を、無前提に一つの枠組みのもとでの過程として描いてきた。「末期古墳」に代表される、その外側に位置する地域の歴史は、この枠組みの妥当性を、逆に照らし出す存在でもある。そのような点において、「末期古墳」を始めとする北東北の歴史が、列島全体の歴史に投げかける意味は、小さくないと言えるであろう。

6. おわりに

前方後円墳の成立と各地への波及は、各地域の首長層間の政治的結合が進められていったことを示すと考えられる。古墳時代の長い過程を経て、やがて日本列島の大半の地域は、律令国家に統合されていく。しかし実際の各地域の社会は、決して一枚岩の様相ではなく、地域ごとの環境と密接に結びつき、独自の社会・文化・集団を育んでいた。それらが、それぞれの利害をかけ、せめぎ合い、相互に影響を与え、相互に変容していく過程であったに違いない。古墳時代併行期の、北東北の続縄文文化、南九州の独自の墳墓の存在は、このことを雄弁に物語る。「古墳」そのものの中においても、地域ごとの変異はかなりの大きい。

このように、古代国家形成期においても、日本列島の歴史は決して単一の様相で描かれるものではない。多様な社会が列島に存在し、独自の歩みを続けていた。この事実を示すものとして、阿光坊古墳群に代表される北東北の「末期古墳」は、列島全体の中でも、重要な歴史資料であると言えることができるであろう。

〔註〕

1) 「末期古墳」については、本稿でも述べるように、倭の「古墳」とは、社会的機能が異なると考える。それ故、「古墳」という名称で呼ぶことについては、再検討すべき余地がある。そのため本稿では、従来から使用されてきた用語として、括弧付きで「末期古墳」との名称を暫定的に使用している。しかし問題は、「末期古墳」という名称に限らず、倭の「古墳」についてもあてはまる。倭の「古墳」という名称についても、空間的分節化は、墳墓の実態から帰納された訳でない。「日本」「日本史」という枠組みを前提とし、空間的枠組みはあらかじめ設定されていた中で成立してきた用語である。そのため、前方後円墳に代表される、倭の領域の墳墓についても、括弧付きで「古墳」と表現した。より広い一般的な意味合いで使用する場合には、特に括弧を付けないこととする。

2) 蔵手刀を始めとするこれらの刀については、その分布が北東北に偏ることから、その製作地を北東北に求める意見も強い。しかし、このような見方は、それが副葬されている「末期古墳」の様相から考えると首肯し難い。蔵手刀などの刀が、それを所有した人物にとって、何らかの権威を表したとしたならば、それを製作し供給した側と、供給された側との間で、何らかの格差が形成されていくと考えるのが自然であろう。北東北のいずれかの場所で製作されていたと想定した場合、地域を越えても格差が顕在化しない「末期古墳」の均質な様相とは、不整合であると言わねばならない。「末期古墳」の様相からは、北東北の中に中央と地方の関係が見出し難いという現状を踏まえると、蔵手刀などの刀が、北東北で製作されたと考えることは困難である。

〔引用・参考文献〕

東 憲章 2001「地下式横穴墓の成立と展開」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅰ分冊第4回九州前方後円墳研究会 497～504 頁

石郷岡誠一ほか 1984『秋田臨空新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

伊藤玄三 1967「末期古墳の年代について」『古代学』第14巻第3・4号 217～224 頁

宇部則保 1994『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第57集

大野 亨ほか 2004『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』八戸市埋蔵文化財調査報告書第102集

小保内裕之ほか 2006『田向冷水遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集

工藤竹久ほか 1990『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集

小谷地肇ほか 2006『下田町内遺跡発掘調査報告書9』下田町埋蔵文化財調査報告書第22集

坂川進・渡則子 2002『丹後平古墳群 丹後平(1)遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第93集

高橋信雄 1987「岩手県における末期古墳の再検討」『北奥古代文化』18 1～24 頁

高橋與右衛門ほか 1995『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第214集

長島町教育委員会 1982『長島の古墳』

西野 修 1986『徳田遺跡群詳細分布調査報告書—藤沢えぞ森古墳群の発掘調査—』矢巾町文化財調査報告書第8集

広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社 24～26 頁

広田遺跡学術調査研究会編 2003『種子島広田遺跡』鹿児島県歴史資料センター黎明館

藤沢 敦 1997「東北北部の末期古墳の主体部構造」『1997年度東北史学会考古学部会研究発表要旨・発表資料』

藤沢 敦 2001「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第48巻第3号 41～55 頁

藤沢 敦 2004「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」『古墳時代の政治構造』青木書店 295～308 頁

村木淳・藤田俊雄 1996『丹後平(1)遺跡 丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集